平成 21 年 12 月 15 日

各位

NPO法人国際空道普及委員会　理事長
一般社団法人　全日本空道連盟　理事長
大道塾 代表師範・塾長　　東　　孝

世界大会の総括

世界大会への参加協力有難うございました。お蔭さまで約 80 ヶ国からの申し込みがあるほどの大きな大会になりました。又、あれほど激しいレベルの高い大会でありながら他の総合スポーツでは多数起きる深刻な怪我も殆どなく、空道の高い安全性が証明された大会でもありました。残念ながらご存じの世界的経済崩壊の為、世界組織としては新興団体で経済的サポートを行う余裕があまりない現状では最終的に約 50 ヶ国からの参加となりました。

しかし、前回までの世界大会はオープントーナメント形式で連盟以外の団体や個人からも参加を認めていたのを、オリンピックスポーツの全てがそうであるように、今大会からは連盟加盟国のみの参加としたにもかかわらず、この 4 年間で加盟国が 16 ヶ国増えました（その他に希望していながら今回上記の事情で来日できずに“加盟申請中”の国が約 10 カ国あります）のは、空道の益々の発展拡大を示唆している証左だと言えるでしょう。

とは言いながら、空道の今後益々の健全な発展の為に調整しなければならない新たな課題や問題も見えて来ました。そこで大会関係者各位（役員、委員、審判、選手）のほかにも、多くの皆さまの意見を聞き参考にしたいと思いますので、宜しくご笑覧の上、率直なご意見をお聞かせ下さい。

大会は全階級をロシアが制覇するという、恐れていた結果になってしまいました。以前からのロシアの空道人口の増大（現在５万とも１０万ともいわれる）や、殆どの選手がプロの指導者として、もしくは学生であっても就職に有利になる空道のために１日を使え「１日６～８時間ほどの練習を積んできた」と豪語するのを耳にしたり、今年に入ってからの強化練習の期間（１～２週間）や回数（２～３度）などを聞く度に危機感は募りました。

一方の日本側は社会人が主体で仕事との両立を図りながらするしかなく、どうしても練習時間の不足は明白だし、最近の選手が「力で勝てないから技で」などと7～8割の力を持っている者が初めて言えるセリフで、ウェイトトレーニングを軽視してきた結果、選手の体力が年々低下しているのを感じる度に「技は力の中にあり」という有名な原則を引用し「子供はいくら技が上手くても大人には勝てないんだ！」と具体的に叱咤しても思うような反応は得られませんでした。

上記の事情の「空道連盟」としては土日を使って出来る限りの強化練習を繰り返したり、ロシアの国際大会の映像をコーチや選手各人に配り分析させ対策を練ったりと、これまで以上の危機感で対応し「圧倒的な体力差をまだ優位に立つ技でカバーすれば、ある程度は・・・」と祈るように予想していたのも虚しく、向上して来た技術に加えての圧倒的な体力、地力の前に、恐れていた結果になってしまいました。

試合内容そのものは空道が理想として通りの、突き、蹴り、投げ、締め、関節と言ったあらゆる技が飛び交い、息もつかせないような緊迫した試合が多く有りました。また、全体的にレベルが向上していたにも拘ら

ずこの種の大会ではよくある大きな怪我もなくおり、エキサイティングな実戦性と、それと矛盾しがちな安全性を証明できましたし、見る側に感動を与えるような大衆性（競技性）という点をもかなり満足させたといってよく、この三点をどんな他の総合武道や格闘技よりも総合的に融合させていたと自負してよいと思います。

日本勢が次々と敗退するのを悔しい思いで見ながらも、「空道はここまで来たんだなー」と、「これが21世紀の新しい武道」という意気込みでスタートしたものの、グローブ（ムエタイ）論争や柔術ブームに翻弄され「あんな中途半端なのは云々」と言われ続けた「空道」の今日の姿に感動すら覚えたのは、私だけではないでしょう。ある古参の支部長は「日本は負け、これからまた頑張るしかないけど、空道は凄いすねー」と手を握って来たし、柔道の高名な師範には「この世界大会の上位選手はオリンピックレベルだ」と言って頂きました。

「ロシアが優勝を独占！」と一口に言っても前回ｱﾙﾒﾆｱで出場していた選手が今回はロシアだったり、優勝者の中に旧ソ連の地方の民族の選手が多かったりと、空道のより広範な伝播ということなども勘案すれば、一概に悲観することはないのですが、勝負論、技術論とは離れて、空道の理念である「社会に寄与貢献するための心身を養成する武道（社会体育）」という観点からみた場合、試合で海外勢が主導権を握るようになれば、創設以来の理念である「社会に寄与貢献する」部分や、心のありようを要求される「武道」の部分より、民族や宗教を異にし、千差万別の価値観を持つ彼らにとっての共通の価値観である“数字”や“時間”で、単なる勝ち負けを競う「スポーツ（競技）」の部分が強調されるのは世界に広がった、他の武道でも見られるところです。

この考えが極端に走れば、必ず「人間関係は二の次で良い。強ければ、勝負に勝てばいいんだ」という強者至上主義、勝利至上主義に陥ります。価値観のまだ定まらない若者がそういう空気の中で練習中心の生活をし、社会と遊離したまま成長したなら、競技者としての引退後に、急に社会性を期待することはできません。現役選手としてチヤホヤされている時は“好青年”であった選手が、現役引退後一般社会に溶け込めずに（特に、逆境に立ったり、不遇な状況に陥った時などには）容易に“乱暴者”、“無法者”となる事例は、あらゆるスポーツではよくあることですが、武道・格闘技は正に他を制する技術を教えるものです。彼等、彼女等がそんなことになったなら、「社会に寄与貢献する」とは全く逆の結果になってしまいます。日本は世界でも有数の戦う競技が盛んな国ですが、欧米の現状と比べて無法社会にならないできたのは、多くの格闘技にも、根底には「心身を鍛えるのは社会に寄与貢献するためだ」という“武道”の理念が根底にあったからだと思います。この理念は絶対に維持しなければならないと思います。

先日の大会後の打ち上げである年若の高名な格闘技指導者が「今までは先生が言ってき『“空道”は格闘技ではなく“武道”だ』という意味が分からず、『(普通に良い青年ならば)格闘技で良いじゃないか！』と思っていましたが、自分もそれ相応に年を取って来て、自分の弟子の中にチラホラそういう姿を見るようになると、やっと先生の言葉に納得できるようになりました。勝ったけどロシア人は前回よりずうっと礼儀正しかったじゃないですか。空道の理念は確実に根付いていますよ」と言われ、試合結果に落ち込んでいた私に小さな喜びを与えてくれました。

しかしながら、だからこそ、「他人を制するもっとも効果的で強力な技術体系」を世界に広めた日本には、出来る限り長く、「空道の理念が、この競技の DNA となる」までに競技的、体制的の両面で主導的立場を維持する義務があるのです。

ましてや総合格闘技は海外では、極端な見方をすれば「プロが行う“Violence(暴力)”を見る競技」として普

及していますが、空道は主として一般社会人を対象に「護身として最も有効な“武道スポーツ”」として展開してきました。その空道が上記のような単なる“Violence な競技”として定着したのでは、暴力の一般社会への放任となり「野獣を野に放す」ごとき事になります。そういう意味で“武道スポーツ＝空道”の理念を体現してきた日本は、もう一度立ち上がらなければならないのです。２年後のワールドカップに向けて、もう戦いは始まっています。指導者、選手が一丸となって“失地回復”に取り組むことは我々の義務でもあります。

しかし何気なく“一団結して”と言う時、一つ気になる事に気付きました。それは試合も上位戦になってくると、ロシア勢は少ない人数でも会場全員がそうであるかのように「ロシア、ロシア」と大きな声で声援を送り自国の選手を奮い立たせるのですが、対戦相手である日本側からは「日本（ニッポン）、日本（ニッポン）日本」という声が出ないのです。精々が個人名か自分が属している支部や道場の名前かです。これはどういう事なのでしょうか？日本の試合場でロシアコールは会場を覆い尽くし、一方の地元である日本からは日本（ニッポン）コールが起きない！！！何故なのでしょうか？日本人は首相が“宇宙人”だからこれで良いのでしょうか笑？そこまで言わなくても地球市民だから（？）でしょうか？綺麗だが根のない夢想に日本を任せて良いのでしょうか？

とまで大きく話を広げないでも、こんなことでは 2 年後にロシアで開かれるワールドカップ、現代風にいえば“アウェイ Away”、昔風に言えば“敵地”での時にはどうなるのでしょう？

いつも言いますが、私は武道以外には物事を深く勉強してきたとは言えないので、他人と際立って離れた独創的な考えは主張しないできました。テレビなどでそこまで勉強したとも思えない人が独創的な意見を開陳するのをみると感心する方です。（一目置いていたある有名な評論家が武道に関して滔々と喋っているのを聞いた時「この人は偽者だ」と類推しガッカリした覚えがあります） 二つの考えがある時は “足して二で割る” 選択をし、実行するにして慎重に“優柔不断”で、なるべく真ん中を歩いて来た人間で、決して片側には寄ってない積りです（だからウチは「武道団体なのに緩い」と言われる事もあるのですが 泣）。

その私でもこの現象はショックを受けました。そういう考え方には距離を置いてきたつもりですが、敗戦以来の“日本弱体化政策”は見事に実を結んだんだな、と実感した時でした。サッカーのワールドカップではあれ程の日本（ニッポン）コールが起き、「健全な愛国心」などと称賛され、選手はどれだけ力付けられただろう、と想像できるのに・・・・。

一番狙われた“武士道“の末裔だから“武道”の試合での日本（ニッポン）コールは、正真正銘のスポーツであるサッカーとは違って気後れするのでしょうか。現代で武士道を持て囃す風潮には常に私なりの反論をしつつも、「しかし武士道から“死”の強調を除いた“武道”は日本の根幹になければならない」と説いて来た積りですが・・・（「チョと待った武士道」http://www.daidojuku.com/home/column/07.html ）

戦後教育の全盛期に育った私も若い頃はそれに気付かず「愛国心なんてない」という事に一種のカッコよさを感じていましたが（「はみ出し空手」）、この仕事のお陰で世界を回り「愛国心を持たない日本の方がおかしいんだ」という事に気付きました。そんな私なりの意見をテレビのインタビューでも言いましたが（見事にカットされていました）“芯”のない日本が年々衰退して来ていると言われるのも“宣（む）べなるかな”（無理がないんだな）と暗澹たる気持ちになりました。たかが武道の試合での現象だと言う人もいると思いますが、その根底には深くてどうしようもない虚無が広がっているような気がします。皆で考えてみるべき問題ではないでしょうか？

追記：以下はこれまでとは違って、世界大会参加国からの今大会の選手規定についての「プロ、もしくはセミプロ選手の参加についての意見、クレーム」に対応し加盟国に送った、アンケートの１項目です。皆様のご意見も聴かせて頂きたいと思います。

球技など他のスポーツではプロとアマチュアが戦っても点数での差でしかないが、武道や格闘技では(ボクシングでプロとアマが同じリングで戦うことは絶対にないと同じように)生命の危険に直結する。現状では１０年以上の空道歴を持つ国と（他団体での経験はあるものの）顔面打撃を含んだ空道の経験は１，２年しかない国々の差がある。又、主として空道や他の格闘技で生活費を得ている平均一日 5，6 時間以上練習できる選手層（Pro fighter、or Semi Pro = Professional Instructor = P Category）と、主として空道以外の仕事で生活費を得て、空道は 自己の鍛錬 =武道と捉え平均一日 2 時間程度しか練習できない選手層（Budo＝B Category）などが混在しており、レベルの差が顕著であり、安全性を確保する意味でも区分が必要である。● 万が一、この大会で重大な事故が起きた場合、新しい武道である為に受ける“感情的な”反感を受けたり“必要以上”の危険性が論じられ、空道そのものの存続に繋がる。更にはその責任は、審判とセコンドに帰するが、それでは選手のみではなく審判やセコンドの希望者もいなくなるだろう。今大会参加の多くの国からこの事への不安や抗議が出ている。● そこで 1) 当面5-10年間(レベルが平準化するまで)、P Type の参加を制限し、レベルの平準化を期する。2) 同じく5-10年間、P、B 両者で二部制の大会を行う。3) 各大陸連盟持ち回りのワールドカップは地元の選手の活躍の場を作る意味で B Category のみの大会とし、国際連盟（日本）主催の世界選手権は両者の二部制にする。4) ３）を5-10年の年限を持って行う。5) P,B の区別はしないが、代表選手人数を、主催国を除いて、各国平等にする。

以上の 5 つの案の中で、もしくはそれ以外に何か方法があるなら、総本部宛、ご提案頂ければ幸いです。